

張天翼における身体性とグロテスク

福長悠

日本学術振興会特別研究員 PD

1. はじめに

張天翼（1906-85）は南京に生まれ、杭州の宗文中学に在学中の1922年に施蛰存、戴望舒らとともに文学結社「蘭社」を結成し、『礼拝六』などの雑誌に投稿を始めた¹。施蛰存と戴望舒は後にモダニズムの作家として名を馳せるが、張天翼は魯迅の「阿Q正伝」に影響を受け、1929年には魯迅の紹介を得て「三天半的夢²」（三日半の夢）を『奔流』に発表し、新文学の作家としてスタートを切った。張天翼は労働者や農民、小市民、兵士を題材にした作品を発表し、1931年に発表された「二十一個³」（二十一人）により文壇の新人としての地位を固めた。「二十一個」は軍閥混戦を戦う兵士の反乱を描いた作品であり、テキストには兵士の話し言葉が用いられていた。おりしも文壇は文芸大衆化論争のさなかであり、張天翼は大衆の俗語を作品に取り入れた作家として高い評価を得た⁴。胡風は以下のように述べる。

天翼底處女作三天半的夢在一九二九年出現，使讀者嗅到了一種新鮮的氣息，接着一九三〇年發表了從空虛到充實，一九三一年發表了二十一個以後，就受到了文壇底注意，被承認爲「新人」——新的作家了⁵。

天翼の処女作「三日半の夢」は1929年に発表されると、読者に新鮮な息吹を感じさせ、続けて1930年には「空虛から充實へ」を発表し、1931年に「二十一人」を発表して以降は、文壇の注目を集め、「新人」——新しい作家とみなされるようになった。

張天翼はプロレタリア文学の新人作家としての地位を確立すると、1932

年には農村の少年の視点から民衆運動を描いた「蜜蜂⁶」や、生き別れになった兄弟二人を通して格差社会を描いた長編童話『大林和小林⁷』（大林と小林）など、子どもの視点から社会の矛盾をとらえる作品を発表するようになり、新中国成立後はもっぱら児童文学者として活躍した⁸。

30年代初頭の張天翼作品を特徴付けるものとして、本論文では身体表象に着目する。特に、初期の軍隊小説より「二十一個」および「仇恨⁹」を取り上げることにより、身体の危機の表現を分析し、また長編童話『大林和小林』における身体と祝祭性の関係を検討する。

分析を通じて、身体は個人と外界の接触と侵犯の場でもあるがゆえに、個人と集団あるいは環境との関係を照らし出す場であること、また身体という主題が人の物質性や卑俗さを暴きだすことが明らかになるだろう。そうした特質を浮かび上がらせる概念として、本論文では「グロテスク」に着目する。

浅野純一は、張天翼の「仇恨」と施蛰存の「石秀」における流血の場面を比較して、「張天翼にも、施蛰存のところで触れたクローズアップとグロテスクを指摘できる。ただ、施蛰存に比べてさらに（中略）部分の羅列がある」と指摘する¹⁰。

批評におけるグロテスクはいくつかの意味を持つ。グロテスクはイタリア語「グロッタ」（洞窟）から派生した語であり、本来は15世紀に発掘されたローマ時代の遺跡に特有の文様を指していた。また今日では、「滑稽な」「突飛な」「奇怪な」などの意味で用いられ、「気味が悪い」という意味で日本語にも定着している¹¹。

15世紀に始まる「グロテスク」の語を文化論の概念として昇華したのは、ミハイル・バフチンが『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化¹²』で提示した「グロテスク・リアリズム」であろう。本論文では、『大林和小林』の読解にあたっては、バフチンを援用し、同作品においてグロテスク・リアリズムと身体性、祝祭性、笑い、言語遊戯、両面価値などバフチンが同書で提示する概念が深く結びついていることを示す。

2. 軍隊小説「二十一個」、「仇恨」——身体の危機と連帯——

まずは張天翼の出世作となった「二十一個」（二十一人）を取りあげる。同作品のテキストは、はじめから濃厚な身体性を帯びている。

物語は軍閥混戦を戦う兵士の一人称で語られる。彼の所属する中隊は疲労と不眠により極限状態に追い込まれた状況で、他の部隊の援護退却を命じられ、交戦中に負傷者が続出するが、過酷な戦闘を終えた後、上官は行軍についてゆけない負傷兵を銃殺せよと命令する。兵士たちは上官に反旗を翻し、上官を追い出したのち負傷者を助けながら新たな道に歩を進める。テキストは以下の語りから始まる。

我們在白蘆溝休息下來。……

走了一天兩晚。腳板起泡，泡破了又起，起了又破，結成一塊厚皮，和襪子死死貼住，襪子脫不下來。……身上滿身虱子。打幾下衣服想打下虱子，可是襯衫像郵票黏住着皮肉，打不動。褲子雖然在河裏渡過，現在却牠自己乾了起來：不過比以前緊些。……（張天翼「二十一個」1頁）

おれたちは白蘆溝で休みを取った……。

一日二晩歩き続けた。足の裏にまめができ、破れてはまたできて、できてはまた破れ、分厚い皮になり、靴下にべったり貼りつき、靴下が脱げなくなった。……体中虱だらけだ。服を叩いて虱を追い払いたいのが、シャツは切手のように肌に粘りついて、動かせねえ。ズボンは川を渡ったあとだが、いまは自然に乾いて、ただちっとばかしきつくなった……。

足にまめができては破れ、皮膚と衣服が粘着し、身体の内部と外部が癒着するという不快感と、虱という卑小な存在が着衣の中に入り込み追い払うこともできない搔痒感が、行軍を続ける兵士の苦痛を皮膚感覚として語る。二晩にわたる行軍による疲労に不眠が重なり、語り手は精神や感覚を鈍麻させてゆく。

心裏空空洞洞的。怕倒不怕：沒有工夫怕。已記不得自己有手，有腳，有腦袋，也記不得自己是什麼東西，只是，別人走你也走，別人放槍你也放，別人逃你也逃，跟着別人做，老沒有錯。……大家都在做夢。（張天翼「二十一個」7頁）

心の中は空っぽだ。怖いとも感じねえ、怖いなんて感じてる暇なんかねえ。もう自分に手がついていて、足がついていて、頭がついてるってことすら忘れちまって、自分が何者なのかさえも忘れちまって、ただただ他人が歩いたら歩き、他人が発砲したら発砲し、他人が逃げたら逃げ、人にあわせていさえすりゃあ、いつだって間違いねえ。……みんな夢を見ているんだ。

磨り減った感覚の中で、語り手は恐怖感や身体感覚を喪失していき、自身の行動を他人に同調するにまかせる。自己の身体と精神の個別性は失われ、心身ともに軍隊という集団に埋没してゆく姿が描かれる。続けて敵軍が眼前に現れた時、自軍と敵軍が生死を賭けた戦闘を繰り広げる状況であるにもかかわらず、語り手は敵と自軍のあいだに同質性を想像する。

敵人就在面前！自然一定都跟我們一樣，我們沒有瞧清他們的臉子——誰有工夫去瞧他們的雞巴臉子；——不過他們眼睛也一定和我們的一樣，不大張得開，也一定空跑了個幾天幾晚早路。（張天翼「二十一個」9頁）

敵兵がちょうど目の前にいる！もちろんきっとおれたちと同じなんだ、おれたちにやつらの顔ははっきり見えねえけども——やつらのツラつきなんか見てる余裕なんかねえ——だがやつらの眼もきっとおれたちと同じで、しっかり開けていられず、むだに何日も何晩も歩かされてきたんだろう。

自身が軍隊という集団に埋没していく感覚と、自軍と敵軍の兵士に同質性を見出すまなざしのはざまにあって、語り手の中隊は他の部隊を援護退却するため、敵軍と交戦する。戦闘の場面は以下のとおりである。

個個的身上，手上，腿上，槍上，刀上，見糊着紅水，也不知是別人還是自家的。刺刀上的血流着流着凝住了，凝住了又串進了誰的什麼東西，便又有血流着：只要刺刀還是在一個活人手裏，那上面的血老會一層層加上去。……（張天翼「二十一個」11頁）

めいめいの体に、手に、足に、銃に、刀に赤い水がねばりつき、他人のものか自分のものかもわからねえ。銃剣についた血は流れ流れてるうちに固まり、固まってはまた誰かの何かに突き刺さり、また血が流れる。銃剣が生きてるやつ手に握られているかぎり、血は一層また一層と重なっていく。

身体はあまりに容易に損傷され、血だけが銃剣の刃に重なっていく。流れる血は他者のものか自己のものか区別できない。双方が武器を手を衝突するとき、暴力をふるう身体とふるわれる身体、味方の身体と敵兵の身体は同質ものとして表象される。

語り手は交戦中に負傷し人事不省に陥るが、救護を受け意識を取り戻す。この時点で、兵士たちの苦痛と怨嗟は限界に達していた。負傷により行軍について行けない兵士を銃殺するよう上官は命令するが、兵士たちは服従を拒否し、上官を追い出す。彼らは負傷した敵兵を発見し、彼を仲間に加えた二十一人で歩き出す。

“咱們向東再向南”來興帶着路。

大家擠在一起走，大家像有一塊皮肉聯着似地，誰也分不開誰，一分開便得沒命。

九個不帶一點花的打頭走，手指按在槍機上，怕萬一有什麼王八蛋來。……

“操他屁股，掩護退却，這才是掩護退却哩，”來興自語着。

大家都笑了起來。（張天翼「二十一個」20頁）

「おれたちは東に進み、それから南へ向かおう」來興が先導を務めた。

みな一緒に固まって歩く。みんなまるで一塊に皮も肉もつなが

っているかのように、誰一人として離れられない。もし離れたら、命はないだろうな。

九人の全く負傷していないやつが、銃の引き金に指をそえて先頭を歩いた。万一だれかクズ野郎が来やがったら……。

「くそつたれの援護退却だよ、これこそがほんとの援護退却だぜ」来興はつぶやいた。

みんな笑いだした。

ここで再び冒頭と同じ粘着のイメージが現れる。冒頭では、身体に衣類が粘着する不快感と搔痒感が兵士を苦しめる。戦場の場面では、敵と味方の差異も、自己と他者の差異も消滅した存在として、兵士たちの生命の損耗が描かれる。一人称の語りは、極限状況と集団行動により兵士が心身の両面で個の存続を脅かされ、集団へ埋没するさまを描きつつ、一面では自己と他者の差異や、敵味方の対立を捨象する。

身体の危機と一体性の感覚の危ういせめぎあいは、最後の場面であざやかに反転される。粘着のイメージは、二十一人の兵士を「一塊」に喩える身体的な一体感と連帯の感情へと転換される。粘着の強度は兵士の同質性や連帯の強固さを暗示し、彼らの行く先にかすかな希望を照らし出す。物語は一同が笑う場面で幕を閉じる。身体は外界により侵犯され負傷する危機の場であるとともに、人と人の連帯の基盤となる。

次に取り上げる「仇恨」は、軍閥混戦の中で村を焼け出された難民たちが、三人の敗残兵と出会い、両者が敵対感情を乗り越えて連帯する物語である。難民たちは道行きの途中で、負傷した男を見つける。

一瞧清這男子全身怎麼發黑，他們的五臟都抖索起來。這男子背上胸上給砍了七八刀，帶血的紅肉翻出到外面。幾百萬幾千萬螞蟻堆在七八條刀傷上，堆在這些紅色的槽裏，用夾子啃着他的帶血的肉，連刀傷有多深都瞧不出了。（張天翼「仇恨」97頁）

その男の全身がなぜ黒いのかかわると、彼らの五臓六腑はぞつと震えた。男の背中と胸には七八か所刀傷があり、血まみれの赤

い肉がむき出しになっていた。何百万何千万という蟻が七八か所の刀傷に群がり、赤い溝の中に群がり、血まみれの肉にかじりつき、刀傷がどれくらい深いかさえもわからない。

男は、軍隊に徴発された「伕子」(人夫)であるという。刀により負傷した「紅肉」の傷口には蟻が這いまわり、男をさらなる苦痛に苛む。男は一思いに殺してくれるよう求めるが、村人たちは手を下すのをためらい、男を連れて再び歩みを進める。引用個所では、触覚と痛覚が輻轉する感覚的表現により苦痛が表現され、生々しいグロテスクさをもたらしている。

このあと、難民たちは三人の敗残兵と出会う。軍隊に村を焼かれ、流亡の境遇に置かれた難民たちは、軍に激しい憎しみを抱いており、三人の敗残兵を見つけると取り囲んで暴力をふるう。海老頭という名の難民は、兵士に家族を凌辱され殺害された恨みから、敗残兵の殺害を主張する。「こいつらを殺せ……畜生のご先祖様のところに送ってやるんだ、殺して煮て食うんだ……人でなしどもを殺せ……！」(把他們宰了……操你歸了包錐的祖宗，宰了他煮着吃……宰他媽的！……)(張天翼「仇恨」100頁)。

難民たちが敗残兵の過去を問い詰めると、敗残兵はかつての職業を「種地呀」(野良仕事だ)と答え、食い詰めて兵士になった事情を語る。この一言が両者の連帯の契機となる。難民たちは「彼らはずっと兵士たちを違う世界の住人のように思っていた。しかしどうしたことか、この兵士たちも野良仕事をしていたと言うのだ……」(他們老覺得這些兵油子彷彿是另外一個世界裏的東西。可是怎麼，這些兵油子說他們種過地……)(張天翼「仇恨」104頁)と考える。敗残兵も自身と同じく土に生き家族を持った人間だと知ったとき、難民はもはや無節制な暴力を彼らにふるうことができない。

共感をさらに強めるのは、「武大郎」と呼ばれる敗残兵の生々しい傷口が難民たちの目にさらされる場面である。「武大郎」は左足を負傷しており、蛆虫を取り除くため、傷口に巻いていた布をほどく。以下の描写は、張天翼のグロテスクを示す例としてよく引用される。

傷口像茶杯口那麼大小。成千累萬的蛆在這紅色的洞口裏爬着，

全都吃得白白胖胖的，身上沿着膿血。紫紅的血，淡黃的膿，給搗成了一片。灰布剛一解開，這些白胖的蛆蟲害怕似地亂竄亂奔起來。有幾條爬出傷口，把背脊一鞠一鞠地爬上武大郎的手，他手上就給彎彎曲曲畫了一條紅線。有幾條鞠得不小心，摔到了地上，在滾燙的黃土裏掙扎着。（張天翼「仇恨」106頁）

傷口は茶碗の口ほどの大きさだった。何千何万の蛆虫がこの赤い穴のなかを這い、みな白く肥え太り、血と膿をしたたらせている。赤黒い血、薄黄色の膿が一緒くたになっている。灰色の布がほどかされると、白く肥えた蛆虫は恐れを感じたようにのたくり始めた。何匹か傷口からはい出し、背をくねらせて武大郎の手に這い上がり、彼の手にくねくねと赤い筋を引いた。何匹かはうっかりして地上に落ち、焼けるような黄土の中でもがいている。

外界にある自然環境としての蛆虫が身体を蚕食し、身体から引きはがされた蛆虫と血を黄色い大地が呑み込む。「二十一個」では虱が兵士たちの皮膚にまとわりつき不快感をもたらしていたが、「仇恨」の蛆虫もまた敗残兵の身体の内部に潜りこみ、苦痛を引きおこす。昆虫という微細で卑小な存在が、身体感覚のレベルで人を脅かすという転倒がここでは描かれる。

このような描写には、当時から「作者は生活の醜悪な点を暴くことにかけては、不必要なやりすぎをしているようだ。彼は「蛆」「膿」「血」などの文字をあらゆるページに溢れさせ、読者にまったく快感のない嫌悪感を感じさせている¹³」という批判が寄せられていた。

しかし、この場面を目にした難民は「こいつらだって同じだ、同じなんだ……」（他們也一樣的那個，一樣的……）（張天翼「仇恨」107頁）という言葉を漏らす。傷口のグロテスクさが与える衝撃は同情へと形を変える。しかしこの後、武大郎の容態は悪化し、黄土の中に葬られる。

傷口の描写では、蛆虫の「白」、血の「紅紫」、膿の「淡黄」という色彩語が目を引く。彼らを取り囲む自然環境は、物語の初めから身体と同様の色彩を用いて表象される。

路旁邊浪似地滾着高高低低的黃土。太陽給埋在黃土裏，發着

肉紅色。可是太陽還燒得怪起勁的：把他們的皮肉燒得變成紫黑色，似乎還聞得到一股焦味兒。（張天翼「仇恨」95頁）

道のそばには黄土が波のようにうねっている。太陽は黄土のなかに埋まり、肉紅色に輝いている。しかし太陽はそれでもばかに力強く燃えさかり、彼らの肌を赤黒く焼く。焦げ臭いにおいさえも漂ってくるようだ。

太陽の色は「肉」という身体部位により形容される。「紫紅」の血と「淡黄」の膿は、あたかも「肉紅色」の太陽と「黄土」の色彩を身体に置き換えたかのようなのである。新開高明は「農民たちの鬱憤を、ギラギラする太陽の炎熱のものと行進の描写と合わせてする表現のテクニクなど、なかなかすくめており効果的である」、「環境、背景の描写は作品^{ママ}兒体の雰囲気¹⁴の統一、気分上の統一という点で非常に効果を上げている」と評する。

自然環境の描写は畳みかけるように繰り返される。「この世界に存在するのは彼らばかり、天をおおう黄土、地をおおう黄土、肉紅色の太陽があるばかり。ほかに生きたものは何一つない」（這全世界只有他們一團人，只有滿天的黄土，滿地的黄土，肉紅色的太陽。此外就沒有一個生物）（張天翼「仇恨」96頁）。「四方を見渡せば、やはり果てしない長い道。黄色い天地。肉紅色の太陽。天地の尽きるところには霧が立ち込めている」（向四面瞧瞧：還是那麼一條走不盡的長路。黄色的天地。肉紅色的太陽。天地的盡頭在冒煙）（同上、98頁）。「黄色い天地、赤黒い太陽、煮えたぎるような風」（黄色的天地，紫色的太陽，滾燙的風）（同上、107頁）。

蛆虫により身体との外部と内部の境界が脅かされるばかりでなく、修辭の上でも自然環境と人の身体の同質性が強調される。あるいは、黄土と灼熱の太陽に苛まれて地上を這いまわる人々と、傷口を膿と血にまみれて這いまわる蛆虫が、同質の生命であるかのような修辭的な効果が生じている。

物語の末尾でも、黄色い天地と赤黒い太陽が彼らを包む。黄土の大地は難民と敗残兵に農業を通して生活の糧を与え、かつて両者が同一の職業に携わっていたという共感を呼び起こすが、一方では過酷な自然環境として彼らをさいなみ、最後には死せる敗残兵の身体を埋葬する。大地は生命力

を生み出すとともに呑み込む両義的な存在である。

「二十一個」「仇恨」の両作品ともに、皮膚感覚的な粘着のイメージや負傷の苦痛という身体の危機が戦争の惨禍を端的に伝える。同時に身体の危機は、人と人のお互いの立場の相違や敵愾心を越えた共感を生み出し、連帯を生み出す契機となる¹⁵。張天翼は両作品で戦争の惨禍と連帯の可能性を探るが、その結節点となっているのは身体である。

しかし「二十一個」の末尾と異なり、「仇恨」の難民の行く先には不安が付きまとう。作中には苛酷な自然環境の描写が繰り返し現れるが、反復表現は作中人物の発話にも表れる。海老頭は「くそつたれご先祖様のもとに行っちゃえ」（我操你歸了包錐祖宗）という表現で軍を罵倒し、敗残兵は「もしあの機関銃さえ取り上げられていなかったら」（要是那桿手提機關沒給繳去）と繰り返す。

物語の末尾でも、海老頭は「くそつたれご先祖様のもとに行っちゃえ、おれたちみんな災厄のさなかだ」（操你歸了包錐祖宗，咱們都受禍害）（張天翼「仇恨」111頁）と毒づき、敗残兵は「機関銃が取り上げられちゃった、ちくしょう！あれさえあればどんな災厄も怖いものなしだったのに！」（手提機關給繳去了，×你爺爺！有那玩意兒還怕什麼禍害！）（張天翼「仇恨」111頁）と毒づく。彼らは物語の最後でも変わらぬ苦痛と怨嗟を背負っていることが暗示される。

先に挙げた胡風は、張天翼の人物形象の平板さを批判して、その一つに特定の口癖を繰り返す作中人物を挙げる。本作品における海老頭や敗残兵の口癖もその一つに数えられるであろう。しかし、本作品では風景描写や作中人物の発話にみられる反復表現が、物語の始まりでも終わりでも変わることはない、やり場のない閉塞感を修辭的に表現している。

彼らは敗残兵を加えて再び歩みを進めるが、行く先に彼らの生存を保証する場があるかは定かでない。同情による一体感とやり場のない感情がない交ぜになり、余韻を残しながら物語は終わる。

3. 『大林和小林』——身体の危機と祝祭——

『大林和小林』は長編童話であり、貧しい兄弟二人が生き別れになったのち、兄は大富豪の養子となって墮落し、弟は労働者として成長する物語である。1932年に第1-7章が『北斗』誌上に掲載されたが、『北斗』の停刊に伴い連載は中断する¹⁷。

また、『全国報刊索引』から、『現代児童』での連載が一部閲覧できる¹⁸。第2巻第7期、第2巻第9期(1932年11月)、第2巻第11期(1932年12月)、第2巻第12期(1932年12月)に掲載が確認されるが、欠号がありその全体像は明らかでない。第2巻第12期では、連載の中止と単行本出版が予告され¹⁹、続く第3巻第1期からは『大林和小林』に替わり張天翼の『秃秃大王』の連載が開始された²⁰。

単行本は『大林和小林』(現代書局、1933年10月)(以下、「1933年版」とする)が出たのち、幾度か改題され、『秃秃大王及好兄弟』(上海多様社出版部、1936年、未見)、『兩林的故事』(文光書局、1937年)、『好兄弟』(文化生活出版社、1939年)として出版された。1956年には題を『大林和小林』に戻し、中国少年児童出版社から修訂本が出版された(以下、「1956年版」とする)²¹。1932年の『北斗』『現代児童』における連載および、1933年版、1937年版、1939年版の単行本は字句にわずかな異同が見られるのみであるが、1956年版では、作品の細部の描写から物語の後半部分の展開に至るまで大幅な修正が施され、階級闘争を前面に打ち出す物語となった²²。現代中国を代表する児童文学として日本でも複数の翻訳が出版されている²³。本論文では1933年版を底本に用いる。あらすじを以下に示す。

農民の年寄り夫婦に双子が生まれ大林、小林と名づけられる。二人が10歳の時に両親は死去し、二人は生活の方法を求めて旅に出るが、「魔鬼」(魔物)に襲われ生き別れになる。

弟の小林は商人「皮皮」に拾われて競売にかけられ、工場で過酷な労働を命じられるが、卵に変えられた少女「喬喬」を助け、彼女の助言で資本家「四四格」を殺害し、逃走する。小林と喬喬は機関士「中麦」に保護され、機関士の仕事を教わる。

一方で、兄の大林は兎の紳士「包包」に拾われたことがきっかけとなり、大富豪「叭哈先生」の養子になり、唧唧と名前を変え、食事から勉強まで召使たちが面倒を見る怠惰な生活を送っていた。叭哈は労働者に襲撃され死亡する。大林は薔薇公主との結婚式のため汽車に乗り、機関士となった小林と再会する。二人は再会を喜ぶが、大林の取り巻きに阻まれてしまう。大林は怠惰な生活によって肥満していたため、汽車は動かない。小林が汽車を押すと汽車は暴走して海に落ち、海中に投げ出された大林は「富翁島」にたどり着く。「富翁島」は金銀財宝があるが、労働者のいないため食料のない島だった。大林は財宝に埋もれて餓死する。

『大林和小林』は中国現代文学で初めての長編童話であり、先行研究では格差や階級闘争などの社会主義的テーマや、誇張や奇想など児童文学としての特色が議論されてきた。

たとえば伊藤敬一は「とほうもない幻想をあとからあとからくり出すが、それがたくみに現実の悲喜劇や階級闘争と結びつけられていて、面白い効果を出している²⁴」、「それはちょうど、幼児がのびのびと自由に感じたままを描く絵のようで、ある場所がひどく誇張されたり、あるいは矮小化されたりし、一見非合理的なものに見えるが、直感的な鋭さで対象に迫ることができる²⁵」と評価する。

本作品の特徴である誇張や奇想は、身体表象にあっても特異な表現を生み出す。作品の冒頭で、大林と小林は生活の糧を求めて家を出るが、「魔鬼」に襲われて生き別れになり、以下第2-7章では〈小林の物語〉が、第8-14章では〈大林の物語〉が展開する。両者は身体のあり方においても対照的である。まずは〈小林の物語〉を取りあげる。小林は犬の紳士「皮皮」に拾われ、彼のもとを逃げ出そうとするが、追いかけてしまう。

皮皮只是要抓住小林，他就拼命地跑。皮皮先生跑得比小林还快，要是開運動會賽跑起來小林就一定得不到第一的。果然，皮皮先生的前腳離小林只有一尺遠了。

真是不幸哪，皮皮先生的前腳又向小林靠近，現在只有五寸遠了。

小林、快呀、快快跑呀！（張天翼『大林和小林』19-20頁）

皮皮はただ小林を捕まえようと、一生懸命走った。皮皮氏は小林よりも走るのが早い。もし運動会で競走したら小林はきっと一位になれないだろう。はたせるかな、皮皮氏の前足は小林まで一尺に迫った。

不幸なことに、皮皮氏の前足はさらに小林に近づき、いまはたった五寸に迫った。

小林、速く、速く速く走れ！

こののち、小林は皮皮に再度捉えられ、皮皮商店で競売にかけられ、資本家「四四格」に売却される。小林の労働は肉体労働であり、労働を通して強靱な身体を得ることが成長として描かれる。小林は卵に変えられていた喬喬という少女を救出し、四四格を鉄球で打ち殺し、喬喬と逃げ出す。小林の物語は疾走する身体、運動する身体のイメージで満ちている。二人は魔物の追跡を振り切り、中麦という機関士に保護され、機関士の仕事を受け継ぐ。

小林の冒険は、自らの身体を使って走ることに始まる。しかし、犬の紳士にはかなわない。労働で体を鍛え、搾取に反抗することにより、小林は機関士という速度を統御する職を得る。工場の機械や鉄道は、道具を用いた身体能力の拡張であり、小林の物語は少年の身体が近代的な装置により成長や拡張を遂げる物語であると読むこともできる。

一方で、兄の大林は大富豪「叭哈先生」の養子になり、唧唧と名前を変え、勉強から食事に至るまですべて召使が面倒を見る怠惰な生活を送る。叭哈は地主兼実業家であり、その周囲にいるのは、富豪、国王一家、官吏である。第11-13章では、大林と周囲の人々の荒唐無稽な生活が滑稽な筆致で描写される。第11章「大宴会」では宴会が、第12章「皇家小学校」では学校が、第13章「兩種賽跑」（二種類の競走）では運動会の様子が描かれるが、いずれも何らかの祝祭性を帯びていることは注目に値する。

大宴会の場面には国王一家や資本家が招かれ、彼らの旺盛な食欲は巨大な数字によって表される。四四格という人物は小林を購入した資本家であ

るが、大宴会の場面では健啖ぶりを発揮する。

四四格先生一面喝酒吃菜，一面說：

「這菜真好吃，真好吃。比我吃的雞蛋還好吃，還好吃。」

四四格先生一共吃了七十二頭牛，一百隻豬，六隻象，一千二百個雞蛋，三萬隻公雞。吃得綠鬍子上都是油，一滴一滴地滴下去，一直流到薔薇公主的腳邊，把她的右腳都弄油了，像蒸好了的火腿一樣。（張天翼『大林和小林』140頁）

四四格氏は酒を飲み料理を食べながら、言った。

「この料理は本当にうまい、本当にうまい。わしの食べる卵よりもうまいぞ、よりもうまいぞ」

四四格氏は合わせて七十二頭の牛と、百匹の豚、六頭の象、千二百個の卵、三万匹の雄鶏を食べた。食べているうちに緑の髭が油だらけになり、ぼたぼた滴り落ち、薔薇姫の足元に流れ、彼女の右足は油まみれになり、まるで蒸しあがったハムのようなのだ。

大量の食事、髭から床にしたたる油は、この人物の行動の卑俗で醜悪さを表し、物質性と身体性を強調する。大林の物語に登場する資本家や王族など体制側の人々は、おしなべて醜悪で、低俗な人物として描かれる。

霜鳥かおりは、「『大林和小林』では昔話にしばしば登場する王様、お姫様、王子様、天使を作中にあえて登場させ、それらをすべて従来のイメージを覆す形象として描いている」、「つまるところ昔話のパロディーである『大林和小林』は、昔話の否定をテーマとするところから出発しているのである」と評する²⁶。

一方で、鈴木康予は『大林和小林』『秃秃大王』の二作について、「ヒーロー（小林、冬哥儿）、ヒロイン（喬喬、小明）の活躍は、脇を固める悪役たちの強烈な個性のため影が薄められている」、「反対に悪役たちは、必要以上に詳細に描かれている。まるで作者自身がそれを楽しんでいるかのようである。作者は悪役たちを存分に活躍させることにより、冒険ものとしての盛り上がり、おもしろさを増している。すなわち悪役たちの奇怪な

姿、奇行こそが二作の生命力、躍動感の源である」として、それを支えるのが「誇張」「滑稽」の技法であると指摘する²⁷。

さらに黄貴珍は『秃秃大王』の笑いについて、「風刺のなかにある種のユーモアが見える」と指摘するが、『大林和小林』についても誇張や滑稽の表現は単なる風刺ではない。

劉緒源はさらに、悪役たちの幼さを以下のように批評する。「幼さはすなわち童心であり、畢竟は鑑賞に堪えるものである。たとえ彼らが狭量で利己的、醜悪であっても（すべて包包のふるまいに体现されている）、読者の笑いを誘うばかりで、憎しみは生まれにくい」²⁹。

以上のように、先行研究は一見して体制側の醜悪さを暴くかのような表現が、かえって笑いを誘い、作品の魅力となっていることを指摘する。しかし、先行研究は本作品における笑いとう風刺の関係について十分な議論を尽くしたとは言いがたい。『大林和小林』における高位なものの格下げと祝祭、笑いと言語遊戯の特質は、むしろミハイル・バフチンが示す「グロテスク・リアリズム」の概念とその特徴を共有するようである。鈴木康子は張天翼による武俠小説のパロディ『洋涇浜奇俠』におけるグロテスクの特徴について、バフチンを引用しつつ「誇張、滑稽により細部がクローズアップされることで、そこに潜む欺瞞や、暴かれたくない真実が白日の下に引きずり出される」「グロテスクな表現を用いることで、張天翼は特に知識人の有する、表面的な高尚さを崇める傾向、権威へのすりよりなど、彼らの狡猾さや卑屈さを浮き彫りにしている」と指摘する³⁰。

鈴木が挙げるのは、作品における身体的特徴の描写や飲食の場面、主人公の窺視欲であり、「グロテスクな表現の特質は、格下げ・下落であって、高位のもの、精神的、抽象的なものをすべて物質的・肉体的次元へと移行させる」という点である³¹。しかし、バフチンの提示するグロテスク・リアリズムは、単に描かれる対象を貶める表現ではない。グロテスクはバフチンにおいて、民衆的な祝祭空間や笑いの位相、改新への期待など多面的な概念と結びついている。

以下では、『大林和小林』の〈大林の物語〉におけるグロテスクと身体、グロテスクと祝祭の問題を検討し、また作品の風刺性とグロテスク・リア

リズムの関係を検討する。バフチンは中世の「民衆の笑いの文化」に特徴的な「生に対するあの独特な美的概念」としてグロテスク・リアリズムを定義し、以下のように述べる³²。

通例指摘されることは、ラブレーの作品においては、生活の物質的・肉体的原理、つまり、肉体それ自体のイメージ、飲み食い、排泄、性生活のイメージがもっぱら圧倒的な役割を占めている、ということである。これらのイメージは、それに加えて極度に大きさに誇張されている。ラブレーは《肉》と《腹》の最も偉大な詩人であると高らかにとなえられた³³。

グロテスク・リアリズム（つまり民衆の〈笑いの文化〉のイメージ・システム）の物質的・肉体的原理は、全民衆的、祝祭的、ユートピア的アスペクトの様態の中に姿を現わす。宇宙的、社会的、肉体的要素は、分割できぬ生きた総体として、単一な、相離れがたい形で現われるのである。そしてこの総体は陽気な、愛想のいいものである³⁴。

『大林和小林』においても、〈腹〉は象徴的な意味を帯びる。先に引用した宴会の飲食の場面は言わずもがな、「叭哈先生」の富はその肥満した腹によって象徴される。

叭哈先生想要抱大林，可是抱不起来，因为叭哈先生的肚子太大了，伸长了手，还摸不到自己的肚子顶哩，自然抱不起人来的。叭哈先生的肚子真大极了，有一次开运动会，那些赛跑的人就围着叭哈先生的肚子跑的，跑了一圈，大家就跑不动了。（张天翼『大林和小林』123页）。

叭哈氏は大林を抱きしめようとしたが、できなかった。なぜなら叭哈氏の腹はあまりに大きく、手を伸ばしても、自分の腹のてっぺんに届かないのだ。当然他人を抱きしめるなんてできない。叭

哈氏の腹は非常に大きいので、運動会が開かれたとき、徒競走の選手たちはハ氏の腹を回って走った。一周走ったら、みなはもう走れなくなってしまった。

ここでは、選手が巨漢のまわりを走ることにより、選手の運動能力と巨漢の大きさという異なる尺度のものが比較され、運動する身体と豊饒な身体という二つの身体性が対比される。動かない肥満体が動く選手を疲労させるという構図は、〈大林の物語〉において前者が後者に優越することを暗示する。〈小林の物語〉の主題が運動する身体を題材にしたものであるとすれば、〈大林の物語〉はまさに、運動する身体の価値を落とし、豊饒な身体の優位を宣言することに始まる。

学校でさえも、でたらめな知識を教授する滑稽な空間として描かれている。第12章で描かれる「皇家小学校」には学生が教師を選んで一講時ごとに謝礼を渡し、出席したいときだけ出席すればよいという決まりがある。教師たちは歌を歌って生徒を呼び込もうとする。

「哥哥姐姐吃糕糕，
兩塊糕加三塊糕是七塊糕，
七蛋糕，八塊糕，一共是十塊糕。
三個人帶了十頂帽。
一分鐘是七十秒。
我的算術真正好，
價錢最公道，
上一課祇要一斤二兩好珠寶。」（張天翼『大林和小林』156頁、下線部は韻字を示す）。

「兄さんと姉さんがお菓子を食べる、
二つのお菓子、三つのお菓子、足して七つのお菓子、
三人の人が十個の帽子をかぶった。
一分間は七十秒、
私の算数は本当にすばらしい、

お値段は最もちょうどよい、
一回の授業がたった宝石1斤2両」

歌は脚韻を踏んでいるが、愉快的な言葉遊びの内容は、足し算の答えも、分と秒の関係もでたらめである。別の教師は、「一分鐘は八十秒」（一分間は八十秒）と歌い、大林はこの教師の授業を受けることに決める。学校は教師が生徒に規律を守らせるべき場であり、正しい知識を生徒に教授するべき場であるという常識を裏返し、陽気で荒唐無稽、秩序を欠いた学校を書いている。張錦貽は本作品の他の二つの歌と合わせて、教師の歌を引用し、「民間の言語の彫琢と運用は、あちこちにみられる。（中略）これらのわらべ歌と童謡は、張天翼による改変を経てはいえ、もともとの風格を保っており、機知にあふれた諧謔と子供らしいユーモアを表現している。笑いを誘いながら、味わい深く、どのような美しい語彙や言語でも置き換えることができない」と高く評価する³⁵。すなわち、体制側の人物である教師の歌にも、民衆的な機知、諧謔、子供らしさが見えるというのである。張天翼の作品における民間文学の影響は別に検討すべき課題であるが、一見して体制側を格下げする表現が同時に「民間」の特徴も備えるという指摘は注目に値する。同時に氏はこの学校について「無学無能で金儲けのみを目的としている」と批判しており³⁶、権威の格下げに対する評価は定まっていない。

〈大林の物語〉における価値の顛倒是、言語遊戯や登場人物の滑稽な振る舞いにより支えられており、そこには意味の脱臼や滑稽さが如何ともなく生じ、独自の存在感を得てしまう。言語遊戯にはある種の機知と言語能力が必要であり、真に愚昧な者の言語ではありえない。筆者は先に、張天翼の短編小説「蜜蜂」では、農民の息子と養蜂業者の息子が口論を繰り広げる場面があるが、押韻などの言語遊戯を用いるのは農民側であることを指摘した³⁷。張天翼はことばの領域で民衆が体制側に優越するという構図を描いたといえる。しかし、『大林和小林』にあつては、体制側の人物も言語遊戯を用い、読者を笑いに巻き込もうとする。

第13章では、唧唧と名前を変えた大林が小学校の運動会の5ヤード走

に出場し、かめ、かたつむりと競争を繰り広げる。大林は怠惰な生活により肥満しており、最下位に留まるが、周囲の称賛を浴びる。

國王叫道：「唧唧是第三呀，真不錯啊！」

叭哈先生很快活。

「唧唧，我更愛你了，」叭哈先生說，「你跑第三，真不錯。」

有許多人跑來給唧唧慶賀。（張天翼『大林和小林』176頁。）

王さまは叫んだ。「唧唧は三等だ、まったくもってすばらしいぞ！」

叭哈氏はとても愉快である。

「唧唧、わたしはますますおまえが愛おしい」叭哈氏は言った。「徒競走で三位とは、まったくもってすばらしい」

たくさんの人が走ってきて唧唧にお祝いを述べた。

肥満した大林が徒競走に参加し、最下位を得て称賛されるという構図は、運動する身体と豊饒な身体をもう一度対比させる。最下位が称揚されるという価値顛倒がおかしみを誘いつつ、運動する身体の価値を改めて否定する。

〈小林の物語〉でも、小林が魔鬼や皮皮から走って逃げる場面では、運動会の比喩でその身体能力が説明される。「もしこれが運動会なら、ぼくはきつと徒競走で一番を取れるぞ」、「もし運動会で競走したら小林はきつと一番になれない³⁸」。運動会という制度においても、大林と小林の二人は対比される。

続けて、國王の娘である薔薇公主は大林に告白し、二人は婚約する。

〈大林の物語〉では、価値と無価値が裏返される。第11章「大宴会」で國王や富豪が列席しながら卑俗な食事の場面が描かれること、第12章「皇家小学校」で学校の権威や規範性が否定され愉快的遊戯的空間が現れること、第13章「兩種賽跑」でかめやかたつむりが速さを競い敗者が称揚されることは、すべてバフチンが述べるグロテスク・リアリズムの特徴と軌を一にする。王族や資本家など社会の支配者であるべきものは卑俗で肉体

的に描かれ、誤った知識や競走での最下位など、常識的には無価値とされるものが称揚され、祝祭のなかで民衆的な笑いのことばが現れる。

一方で、価値顛倒と風刺性の間には危うい均衡が目指されている。20世紀の人である張天翼の民衆観は畢竟グロテスク・リアリズムの図式とは異なる。バフチンは祝祭的空間の民衆性と平等性、非公式性を繰り返し強調する。「笑いの原理によって組織された、この儀式的・見世物的諸形式はすべて（中略）世界、人間、人間関係について、まったく別種の、アンダーラインつきの非公式、教会外、国家外的見地^{アスペクト}を提供する³⁹」、「カーニバルの言語のすべての形式・象徴には、変化・交替と改新の感激^{パトス}がみなぎり、あまねく支配している真理や権威がおかしく相対的なものであるとの認識がある⁴⁰」。

しかし、『大林和小林』のなかで、民衆はつねに権力者や支配者に抑圧され、搾取される者であり、〈大林の物語〉でもそれは変わらない。運動会の会場では、王子と牛が喧嘩になり、王子が牛を殴ったにもかかわらず、役人の包包は牛を処罰する。

「是的，大林叫做唧唧，唧唧胖了，因此一定要罰你。你不知道今天是皇家小學校開運動會麼？所以我要把你關起來，關你一個月，你下次不許打人。」（張天翼『大林和小林』170頁）

「そうだ、大林は唧唧と呼ばれ、唧唧は太った。だから必ずお前を罰しなければならん。おまえは今日皇家小學校が運動会を開くのを知らないのか。だからおれはおまえを牢屋に入れねばならない。一か月間の牢屋行きだ、以降は人を殴らないように」

包包の奇妙奇天烈な理論は、笑いを誘うと同時に、役人の不公平で不平等な姿勢を際立たせる。徒競走の最下位を称揚する態度もまた、速度を競う真面目な態度を脱臼させ、常識的な価値観を否定する一方で、有力者の子弟をみながおだてあげるさまは、現実の低俗さを暴きだす。価値転倒的な笑いは、能力による序列化を否定する点で反権威的であるが、権力者の能力に対する序列化をも拒否するとき、無能力を容認するという図式に陥っ

てしまう。価値の否定がかえって現状の権力構造に無批判であるという危うさがここでは書かれている。祝祭の笑いと風刺は不即不離に結びついており、どちらか一方には還元できない。

運動会に熱狂する人々のもとに、資本家の四四格が労働者に殺害されたという知らせが舞い込む。叭哈も労働者の襲撃を怖れる。おりしも叭哈が飼育していた南京虫が死に、叭哈は追悼会を開こうとするが、使用人たちは叭哈を裏で批判する。

「叭哈只愛臭蟲。臭蟲死了要開追悼會。如果我們死了，叭哈睬都不睬我們的。」（張天翼『大林和小林』186-7頁）

「叭哈は南京虫ばかり可愛いがる。南京虫が死んだらから追悼会を開くだと。たとえおれたちが死んだところで、叭哈はどうせ構いやしねえくせに」

このあと、魔法で卵に変えられていた人々が蘇り、叭哈を殺害する。『大林和小林』で、祝祭の担い手となる人々と、世界の改新を担う人々の間には、截然とした線が引かれている。叭哈の死後、大林は莫大な遺産を継承するが、最後は「富翁島」に流れつき餓死する。

本節では、身体表象の角度から『大林和小林』を検討し、〈小林の物語〉にあつては身体的能力の増大と拡張により主人公の成長が表現されていること、〈大林の物語〉においては上層の人々の卑俗さや身体性が誇張して描かれるが、そこでは祝祭の笑いと風刺が表裏一体となっていることを指摘した。

ラブレールがガルガンチュアとパンタグリユエルの物語を創作した背景として、バフチンは早害とペストの流行を挙げ、以下のように述べる。

自然力のもたらした災害とペストの流行は、すでに述べた通り、この時代にも（十四世紀にそうであったように）、古代の宇宙的恐怖を呼び醒まし、この恐怖と結びついた終末論的イメージや神秘的観念の体系を生み出したのである。しかしこれらの現象は、

概してすべての破局が^{カタストロフ}そうであるように、通例歴史的批判的態度とすべてのドグマ的命題、価値観の自由な再検討への志向を呼び起こすのである。(中略) 民衆の笑いの文化は宇宙的な恐怖や終末論との戦いを反映しており、陽気で物質的・肉体的な、永遠に⁴¹成長し、永遠に改新される宇宙のイメージを創造するのである(後略)。

ラブレアの創作の背景には災害と疫病の危機があり、災禍は人々の精神に終末論的な恐怖と批判的態度をとともにもたらしたとバフチンは指摘する。『大林和小林』で、張天翼は童話の形式を用いることにより、格差や搾取など同時代の苦難を形象するとともに、それらを誇張し身体のレベルで表現することによって、陽気な笑いへと読者を誘い込む。同作品は現世的な秩序を祝祭的なもじりへ改編することによって笑い飛ばし、その背後に革新への期待を暗示する。

4. おわりに

本論文ではまず張天翼の初期の軍隊小説として「二十一個」「仇恨」を検討し、疲労や負傷という身体の危機が描かれると同時に、グロテスクなまでの身体性の表象が、人と人との間に連帯を形成する契機となっていることを指摘した。

「仇恨」で、大地は作中人物に生業を与える一方で、過酷な自然環境として彼らの身体を苛み、彼らの身体を呑み込む。大地が生み出す場であるとともに呑み込む場であるという両義性は、本論の後半で議論したグロテスク・リアリズムの概念とも重なるものである。

『大林和小林』においては、富豪の生活が祝祭的空間として描かれる。その笑いは、常識的な価値観や現体制の秩序を格下げし陽気なものに置き換えるとともに、荒唐無稽さを際立たせることで権力者や資本家の腐敗や怠惰を風刺するという二重の性質を帯びる。祝祭的空間の快樂と欺瞞は表裏一体である。

初期の軍隊小説に見られる身体の危機やグロテスクと、『大林和小林』にみられるグロテスク・リアリズム的な誇張や祝祭性の間には大きな懸隔があるようでありながら、両者はともに過剰なまでに身体性を強調し、身体を経験を通して一つの時代の危機を描こうとする点で連続する。

最後に、張天翼の作品には民衆性や民間文学からの影響がたびたび指摘されているが、具体的な民間文学や民衆文化との関係は十分に検討されていない。グロテスクと身体表象の背後にある民衆的基盤の検討は、今後の課題としたい。

後注

- 1 張天翼の伝記的事実は下記を参照した。張錦貽「張天翼生年表」『張天翼評傳』希望出版社、2009年12月、410-32頁。沈承寬、黃侯興、吳福輝「張天翼生平与文学活动年表」沈承寬、黃侯興、吳福輝編『中国文学史資料全編・現代卷 張天翼研究資料』知識產權出版社、2010年1月、9-40頁。
- 2 張天翼「三天半的夢」『奔流』1(10)、1929年4月。のちに単行本『從空虛到充實』（聯合書店、1931年1月）に収録される。
- 3 張天翼「二十一個」『文學生活』第1卷第1期、1931年3月。のちに単行本『小彼得』（春光書店、1931年12月）、『畸人集』（良友圖書印刷公司、1936年1月）に収録される。本論文では初出を底本に用いる。また、下記の日本語訳を参照した。張天翼著、高橋俊訳「二十一人」大東和重、神谷まり子、城山拓也編『中国現代文学傑作セレクション 1910 - 40年代のモダン・通俗・戦争』勉誠出版、2018年6月。
- 4 杉本達夫「「俗語」と「新文語」——文藝大衆化論議の一側面——」『中國古典研究』第20号、1975年、192-3頁。
- 5 胡豐（胡風）「張天翼論」『文學季刊』第2卷第3期、1935年9月、661頁。後に単行本『作家論』（生活書店、1936年4月）に収録される。
- 6 張天翼「蜜蜂」『現代』第1卷第3期、1932年7月。後に単行本『蜜蜂』（現代書局、1933年5月）、『畸人集』（良友圖書印刷公司、1936年1月）に収録される。
- 7 張天翼「大林和小林」『北斗』第2卷第1期（1932年1月）、また第2卷第3・4期合刊（1932年7月）に第1-7章が掲載される。単行本『大林和小林』現代書局、1933年10月。書誌情報の詳細は第3節で述べる。
- 8 季穎『日中児童文学交流史の研究——日本における中国児童文学及び日本児童文学における中国』風間書房、2010年5月、47頁。
- 9 張天翼「仇恨」『現代』第2卷第1期、1932年11月。後に、単行本『蜜蜂』（現代書局、1933年5月）、『畸人集』（良友圖書印刷公司、1936年1月）に収録される。本論文では雑誌初出を底本に用いる。また、下記の日本語訳がある。張天翼著、古濱修一訳「仇恨」『支那現代小説集 夜哨線』第一書房、1938年1月。
- 10 浅野純一「中国現代小説の「現代主義」」『金沢大学教養部論集 人文科学篇』第29巻第1号、1991年8月、36頁。
- 11 ヴォルフガング・カイザー著、竹内豊治訳『グロテスクなもの』法政大学出版局、

- 1968年3月。武末祐子『グロテスク・美のイメージ ドムス・アウレア、ピラネージからフロバールまで』春風社、2018年2月、7-9頁。
- 12 ミハイール・バフチン著、川端香男里訳『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』せりか書房、1973年1月。
- 13 注1前掲書『張天翼研究資料』所収、慎吾「关于张天翼的小说」218頁。初出は『益世報』1933年8月26日。原文「作者在揭发生活之丑恶方面,似乎是有一些不必要的过分,他把“蛆”“脓”“血”等等的字眼充满了每一页,使谈者感到一种并无快感的厌恶」。
- 14 新聞高明「張天翼の小説について」『防衛大学校紀要 人文・社会科学編』18、1969年3月、122頁。
- 15 身体の危機と連帯に関する議論は、葉山嘉樹のプロレタリア文学に関する議論を参照した。例えば、平岡敏夫『日本近代文学史研究』有精堂、1969年、351-361頁。柳井まどか「葉山嘉樹の作品における幻想と身体」『人文論叢』18、1992年。柳井は「破碎された肉体は、別個の肉体との連生・共生感覚の感受、死から誕生への移行・変容のイメージとしても存在している」(112頁)と指摘する。
- 16 注5前掲論文、672頁。
- 17 張天翼「大林和小林」『北斗』第2巻第1期、1932年1月。第2巻第3・4期合刊、1932年7月。
- 18 『全国報刊索引』(<https://www.cnbkisy.com/>)最終閲覧日、2021年9月10日。『現代児童』での連載については、鈴木康予「『大林和小林』『はげ頭大王』——張天翼・建国前の童話」『季刊中国』No. 66、2001年9月、70頁に言及がある。ただし、注1前掲書『張天翼研究資料』、『張天翼評伝』等の諸書には言及がない。
- 19 「大林和小林 単行本預告!」『現代児童』第2巻第12期、1932年12月、56頁。
- 20 張天翼「秃秃大王」『現代児童』第3巻第1-12期、1933年3-8月。発禁処分により連載中止。注1前掲書『張天翼研究資料』、18頁による。
- 21 張天翼『大林和小林』中国少年儿童出版社、1956年10月。
- 22 伊藤敬一「張天翼の小説と童話」『世界児童文学』第1巻第4号、1960年12月、72頁。霜鳥かおり「張天翼の「大林和小林」——作品発表時のテーマをめぐって——」『日本アジア言語文化研究』第9号、2002年10月、79頁。
- 23 張天翼著、伊藤貴唐訳「あっぱれ弟」『少年少女新世界文学全集—35—』講談社、1965年10月(1939年版による翻訳)。張天翼著、伊藤敬一、代田智明訳『まぼろしの

- 金持ち島 世界の児童文学5』太平出版社、1977年7月（1956年版による翻訳）。
- 24 注22 前掲伊藤論文、72頁。
- 25 伊藤敬一「張天翼再論（附）張天翼の創作年譜」『人文学報』第36号、1963年8月、143頁。
- 26 注22 前掲霜鳥論文、85-6頁。
- 27 注18 前掲鈴木論文、72-3頁。
- 28 黄贵珍『張天翼与中国现代儿童文学』少年儿童出版社、2020年1月、114頁。原文「讽刺中见出一种幽默来」。
- 29 刘绪源『中国儿童文学史略：一九一六～一九七七』復旦大学出版社、2019年12月、65頁。原文「孩子气亦即童趣，终究还是可欣赏的，哪怕是他们的小气、自私、出丑（这都体现在包包身上），也只能令人发笑，却难以让人生恨」。
- 30 鈴木康予「『鬼土日記』から『洋涇浜奇侠』へ」『野草』第70号、2002年8月、68-9頁。
- 31 注30 前掲論文、68頁。
- 32 注12 前掲書、23頁。
- 33 注12 前掲書、23頁。
- 34 注12 前掲書、24頁。
- 35 注1 張錦貽前掲書、217-8頁。原文「至于对民间语言的锤炼和运用，可谓俯拾皆是。（中略）这些儿歌和童谣，虽经张天翼的改造，也仍保持着原来的风貌，表现出机智的诙谐和童稚的幽默。引人发笑，耐人寻味，而又是一切美丽的词汇和语言都不能替代的」。
- 36 注1 張錦貽前掲書、202頁。原文「不学无术只为挣钱」。
- 37 拙論「飛翔し浮遊することば——張天翼「蜜蜂」論——」『野草』第108号、2022年3月、83頁。
- 38 張天翼『大林和小林』1933年版、99、101頁。原文「如果現在是開運動會，我賽跑一定第一」、「要是開運動會賽跑起來小林就一定得不到第一的」。
- 39 注12 前掲書、12頁。
- 40 注12 前掲書、17頁。
- 41 注12 前掲書、300頁。

附記：本論文の執筆にあたり、北海道大学の田村容子准教授より『大林和小林』1939年版（『両林的故事』）の複写データをご提供いただいた。こ

ここに謹んで感謝を申し上げたい。

また、本研究は JSPS 科研費 20J00123 の助成を受けたものである。